


令和4年度 独立行政法人福祉医療機構
社会福祉振興助成事業

学生等の若者に対する
シームレスな学業・生活支援事業

事業報告書

令和5年3月

 社会福祉法人
巢立ち会

目次

はじめに	3
1. 事業背景・目的	4
2. 事業内容・実績と成果	5
柱立て① 学校連携の構築	5
柱立て② リーフレットの作成・ホームページ・SNS 等広報活動.....	9
直接支援の取り組み（柱立て③～⑤）について	11
柱立て③ オープンスペース	12
柱立て④ 学習支援.....	14
柱立て⑤ 相談支援.....	16
柱立て⑥ 研修会の開催	18
柱立て⑦ 制度設計を考える場の設置	21
柱立て⑧ 大学等におけるメンタルヘルス啓発活動	24
3. 事業成果と課題	27
4. おわりに.....	29
5. 参考資料.....	31
巻末資料（1）講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」 要旨	32
巻末資料（2）「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」アンケート 用紙	47
巻末資料（3）「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」アンケート 結果	48

はじめに

社会福祉法人巣立ち会では1992年（平成4年）の活動開始以来、一貫して精神障害者の地域生活支援を行なってきたり、現在までに何らかの支援を行ってきた利用者は1,200名を超え、400名近くの精神科病院の長期入院者が、当会を利用して地域生活を始めてきた。

また、2009年夏より精神疾患を持つ若者の早期発見・早期支援のための相談窓口を立ち上げた。主に10代から20代の精神病性障害を持っている若者やその家族に対して、心理社会的支援を実施している。しかし、これはあくまでの障害福祉サービスの中での支援である。こうしたサービスを実践していく中で当初我々がターゲットとしていた、精神疾患（統合失調症、うつ病、双極性障害等）の診断を持つ方々だけではなく、はっきりした精神科の診断名を持っていなくても、発達障害の傾向がみられたり、不登校や休学、また社会的不適応を繰り返し、結果的にうつ状態やひきこもりになるなどの若者の存在が多くいることがわかってきている。

社会的には不適応状態にはあるが、疾患や障害という確定ができない、ボーダーラインにいる人たちへの支援を創設することで、より重症化したり遷延化するのを防ぐことを目的に、今回この「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援」を行うことを計画した。主にアナウンスとしては学業支援と居場所という2つのキイコンセプトで広報をした。その結果、明らかにそうしたニーズがあることは確認された。

こうした事業が安定的に地域のニーズにこたえられるためには事業の安定性が必要である。この事業を行政とともに検証することで、行政からもその必要性を認識してもらい、安定的な事業に発展させる必要がある。今後の課題としてこうした連携と理解を求めていく必要性を今年度の事業で確認できたと考える。来年度以降もこうした課題の解決に向けて努力をしていきたい。

令和5年3月
社会福祉法人 巣立ち会
理事長 田尾 有樹子

1. 事業背景・目的

巢立ち会では、障害福祉サービスとして、10代半ばから20代前半までの若者を対象とした日中活動の場を提供してきた。午前と午後にプログラムを行いつつ、個別支援として入学・復学、学業継続、卒業等の学業支援をはじめ、就労支援を含むさまざまな相談支援を行っている。

しかし、そこには医師の診断などに基づき「障害」があると認められた人だけに対象が限られるという限界がある。どの分野でもボーダーラインは存在するが、特に精神障害では、サービス支給の認定を受けるためには精神科通院という高いハードルが存在する。

こうした制度の枠にとらわれずに、若者たちのあるがままの必要性に沿った支援を行える場所と仕組みが必要と考えている。

一方で、縦割り制度の狭間の問題がある。幼年期から思春期にかけて「子ども」を対象とした支援はさまざまなものがあるが、その支援が、思春期から青年期という、人生において大きくその後を決定する時期の支援に繋がっていないという問題も強く感じている。18歳という年齢になった途端に支援がぱっさりと切られる現状が多くみられ、このことは「こども家庭庁」の設置など、国の施策においても解決すべき大きな課題とされている。

本事業では、人生において大切な時期を迎える思春期から青年期の若者を対象に、年齢や制度の壁を越えた切れ目ない支援を提供する。また、そうした支援を持続可能とする仕組みや制度の構築を目指す。

2. 事業内容・実績と成果

柱立て① 学校連携の構築



大学と福祉の連携に向けた会議（第1回）



大学と福祉の連携に向けた会議（第2回）

(1) 取り組み内容

都内の大学の学生支援担当者や大学教員・元教員と「大学と福祉の連携に向けた会議」を2回実施し、コロナ禍の影響や、現在の学生支援の状況について情報共有をした。また、学業や生活の困難やメンタルヘルスの不調を抱えた学生をどのように支援に繋げていけるかなどを検討した。

当初は大学との連携のみの予定だったが、三鷹市教育委員会へのアプローチも行った。教育部長、教育支援担当課長に事業説明を行い、支援を必要とする義務教育段階の生徒へのアプローチとして何ができるかについて、検討を行った。

(2) 成果

「大学と福祉の連携に向けた会議」では、大学ごとのニーズや課題を確認することができ、今後に繋がる連携構築ができた。

東京大学とは、相談支援センターの複数のスタッフと顔合わせをして今後の相談体制をつくった。国際基督教大学では、「大学と福祉の連携に向けた会議」に参加する元教員の紹介で特別学修支援室との連携を構築した。成蹊大学については、個別の相談のみならず、講義で100人を超える学生に情報発信を行うことができた（柱立て8に詳述）。電気通信大学に対しては、学外の組織として学生の支援をする一方で、連携教員（副学長）に対して学内での相談体制構築について提案を行った。

このように会議への参加者を通じて、大学とこれまでにない連携体制が構築できたことは、本事業の大きな成果である。また、教育委員会にも本事業や当会の行っている若者支援について知ってもらうことができ、今後に繋がる関係を構築できた。対象者を従来の範囲から広げたことで、教育機関が課題に感じている層への支援が可能になり、格段に連携構築がしやすくなった。

(3) 活動実績

① 事業説明・スーパーバイズ

支援ニーズをもつ大学生に対してどのようなアプローチをすることが効果的かについて、大学の実情に詳しい元教員、現任教員に意見を伺った。「学内にリエゾンパーソンとなる教員をもつとよい」「様々なニーズがあるので、チラシは何通りかあるとよい」（上野氏）、「授業の中でメンタルヘルスについて学生に情報を伝えていくことはできる」（澁谷氏）、「事業に対するニーズはあると思う」（羅氏）などのコメントをいただいた。

日時 : 令和4年5月31日(火) 15:30~17:00

開催場所: サザン

出席者 : 上野千鶴子氏(東京大学名誉教授)
田中かず子氏(元国際基督教大学教養学部教授)
澁谷智子氏(成蹊大学文学部教授)
羅一等氏(国際基督教大学教養学部客員准教授)

内容 : ・本事業の説明
・通信制高校の取り組みについて
・大学へアプローチについて助言

② 第1回 大学・福祉の連携に向けた会議

4大学、5名の教員、元教員、学生相談担当者が参加した。本事業の概要および本会議の趣旨を説明し、各大学での学生支援の状況を共有した。

看護学部では病棟実習が適性が試される機会になること、自主性を重んじる校風の中でかえって苦勞する学生がいるなど、各大学や学部の特徴によって異なった学生の困難があることがわかった。一方で、発達の偏りのある学生が、自ら選択することやコミュニケーションの不得意さ、こだわりなどによってつまづくケースは、多くの参加者が共通して経験していた。居場所の存在や、課題の進捗管理、教員との調整など、継続的な関わりの必要性を確認した。

各大学に本事業リーフレットの設置を依頼した。

日時 : 令和4年8月25日(木) 18:30~21:00

開催場所: サザン

出席者 : 田中かず子氏(元国際基督教大学教養学部教授)
成見哲氏(電気通信大学副学長 情報・ネットワーク専攻 教授)
渡邊慶一郎氏(東京大学相談支援研究開発センター副センター長・教授)
大木幸子氏(杏林大学保健学部教授)

羅一等氏（国際基督教大学教養学部客員准教授）

田尾有樹子（社会福祉法人巣立ち会）

植田太郎（社会福祉法人巣立ち会）

澤田千恵子（社会福祉法人巣立ち会）

内容：①活動報告

②意見交換

- ・ 支援が必要な学生を支える各大学の仕組みや取り組み
- ・ そうした学生と接する中で感じていること、課題
- ・ 大学と福祉事業所でどのような連携が可能か

③ 第2回 大学・福祉の連携に向けた会議

今回は、前回の出席者に加え、東京大学相談支援研究開発センターから、学生支援を担当するスタッフの方が2名参加された。

巣立ち会で若者支援を担当するスタッフから、巣立ち会で行っている支援についてお伝えした。大学に同行し、10科目以上の担当教員に直接合理的配慮を依頼したり、ときには一緒に講義を受けたり、保護者との調整を行ったりという支援の実際を説明した。また、支援を受けながら大学で学ぶ同年代を見る中で、大学進学を諦めていた方が進学を希望する場合があることを報告した。

成蹊大学での講義（柱立て8）での発表の反響について報告し、大学との連携のために何が必要かを話し合った。相談室に調整機能が不十分であることや、障害や合理的配慮に対する教員の知識不足、情報収集に関して困難のある学生への情報アクセスの保証などの課題があり、大学側のサポート体制の充実も同時に必要であることが話し合われた。

日時：令和5年1月12日（木）18:30～21:00

開催場所：シンフォニー

出席者：田中かず子氏（元国際基督教大学教養学部教授）

成見哲氏（電気通信大学副学長 情報・ネットワーク専攻 教授）

渡邊慶一郎氏（東京大学相談支援研究開発センター副センター長・教授）

若杉美樹氏（東京大学相談支援研究開発センター）

正岡美麻氏（東京大学相談支援研究開発センター）

大木幸子氏（杏林大学保健学部教授）

羅一等氏（国際基督教大学教養学部客員准教授）

田尾有樹子（社会福祉法人巣立ち会）

植田太郎（社会福祉法人巣立ち会）

澤田千恵子（社会福祉法人巣立ち会）

仁木富美子（社会福祉法人巣立ち会）

- 内容　：①活動報告
- ・成蹊大学の講義での発表について
- ②意見交換
- ・大学との持続的な連携にむけて

④ 教育委員会へのアプローチ

義務教育段階の若者の支援に関して教育委員会への働きかけを行った。

6月に三鷹市教育委員会・伊藤幸寛教育部長、教育支援担当課長・星野正人氏に事業説明を実施。教育委員会の取り組み（適応支援教室 A-Room）についてお話を伺った。

義務教育終了後に、制度のはざままで支援が途切れてしまうという課題に対するアプローチについて相談。教育委員会としても課題と感じているとのことだった。A-Roomにおいて、義務教育終了後を見据えた情報提供の一環として、本事業や巣立ち会の若者支援を行う事業所の案内パンフレットの設置を開始した。

また、令和5年6月に市内の中学3年生向けに通信制高校の合同相談会を実施する計画について相談し、市内の校長会で周知の協力を依頼した。

⑤ 国際基督教大学との連携

「大学・福祉の連携に向けた会議」のメンバーで元・国際基督教大学教授の田中かず子氏の紹介で、同大学の学生サービス部長・稲田聡氏、教養学部教授・生駒夏美氏と連携に向けた話し合いを実施した。

巣立ち会からは、退学後によく支援に繋がる方が多いため、そうなる前に繋がれるよう本事業をご活用いただきたいとお伝えした。国際基督教大学には、カウンセリングセンターと、支援の必要な学生の相談および支援を行う特別学修支援室があり、本人や周囲からの相談を受けられる体制になっている。特別学修支援室の支援を受ける学生は昨今増えているとのことだった。サポートはおもに学習に関するものなので、別の相談窓口があればぜひ繋ぎたいとの話があった。

特別学修支援室の担当者をご紹介いただき、巣立ち会の事業所に見学にいらっしゃった。本事業について説明し、大学の現状と課題、今後の連携について話し合った。

今後、学生への情報提供や個別ケースの相談等の連携を行っていくことを確認。後日、支援を必要とする学生の紹介があった。

柱立て② リーフレットの作成・ホームページ・SNS 等広報活動

(1) 取り組み内容

- ① リーフレットおよびチラシ（3種類）の作成、配布
 - ・高校生を対象とした、学習支援についてのリーフレット
 - ・オープンスペース・相談支援についてのリーフレット
 - ・講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」チラシ
- ② 事業ホームページの制作・公開
事業についての Web サイトを制作、公開した。
- ③ Twitter での発信
オープンスペースや講演会の情報を発信した。
- ④ YouTube での発信
本事業で実施した講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」の映像を公開した。
- ⑤ 法人広報紙「巣立ちだより」への掲載
巣立ち会の広報紙「巣立ちだより」にて本事業の紹介を行った。

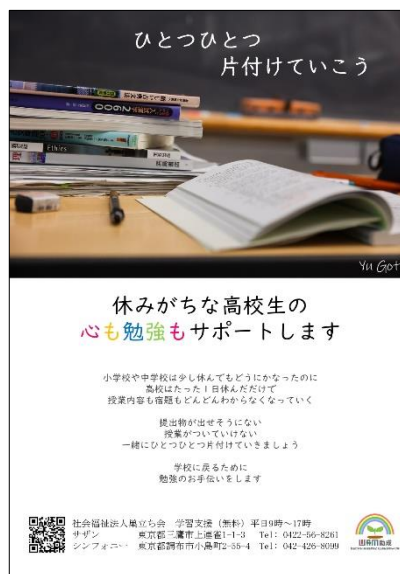
(2) 成果

チラシだけではなく、Web サイト、SNS や YouTube 等、複数のメディアを利用した広報活動を行った。関係者に対しての説明資料として活用できたが、利用対象者である支援ニーズのある若者に情報を届けるという点に関しては、課題が残った。

(3) 活動実績



オープンスペース・居場所リーフレット



学習支援リーフレット

学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業 講演会

ひきこもりをはじめとする 思春期・青年期の方の支援について

【日時】
2022年 11月5日(土)
14:00～15:30(開場:13:30)

【会場】
社会福祉法人巢立ち会 サザン2階

【講師】
澤井大和氏(精神科医)

参加
無料
事前申込制

【お申し込み・お問い合わせ】
電話:0422-34-2761(巣立ち会)
WEB:お申し込みフォームより
<https://forms.as/mcAhyZFOLEHVVDS>

【会場アクセス】
JR 中央線三郷駅南口徒歩3分

【主催】
社会福祉法人
巢立ち会

講演会チラシ

社会福祉法人
巢立ち会

トップ ミッション 事業内容 オープンスペース お知らせ お問い合わせ

学生等の若者に対する シームレスな学業・生活支援事業

制度の枠を越え、切れ目ない支援を

事業のミッション

巣立ち会では、障害福祉サービスとして、10代半ばから20代前半までの若者を対象とした日中活動の場を提供しています。午前と午後にプログラムを行いつつ、個別支援として入学・進学・卒業継続、必要時の学業支援をはじめ、就労支援を含むさまざまな相談支援を行っています。

しかし、そこには医師の判断などに基づき「障害」があると認められた人だけに対象が限られるという限界があります。どの分野でもボーダーラインは存在しますが、特に精神障害では、サービス支給の認定を受けるためには精神科通院という高いハードルがあります。こうした制度の枠にとられずに、若者たちがあるがままの必要性



事業ホームページ

<https://sudachi-kai.or.jp/youthsupport/>

YouTube

まとめ

- ✓ ひきこもりのきっかけは様々です
- ✓ 若者支援において、「きっかけ」の内容を問わず
悩みごとが相談できる体制が求められている潮流
- ✓ 家族だけで抱え込まず、地域の相談機関とつながり
連携して対応していきましょう

2022/11/5 澤井大和氏講演『ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について』

社会福祉法人巢立ち会
チャンネル登録者数 193人

チャンネル登録



YouTube 動画

「ひきこもりをはじめとする
思春期・青年期の方の支援について」

<https://www.youtube.com/watch?v=7HxcdDvVKrY>

直接支援の取り組み（柱立て③～⑤）について

柱立て③オープンスペース、柱立て④学習支援、柱立て⑤相談支援の3つは、三鷹駅近くの当法人事業所「サザン」および、調布駅近くの事業所「シンフォニー」で実施した。この3つの取り組みは一体的に行っており、それぞれの対象者は重複している。

支援対象者は実人数で15名。高校や大学に在籍しているが、メンタルの不調、学習のつまずき、集団への不適應などを抱えている若者がおもな支援対象者であった。医療や福祉などの必要な支援につながっていないが、何らかの支援が必要と思われる若者で、学校の相談センターや教員を通して相談があった方が8名、残りの7名は、障害福祉サービスの支援を受けて進学し、その後通学を継続するために支援が必要にもかかわらず、障害福祉サービスの支給が切れてしまったために継続的支援が受けられなくなってしまった若者であった。

利用者開始時の状況と転帰

	利用場所	年齢	状況	おもなニーズ	転帰
1	調布	19歳	浪人中	学習支援	進路を見直し、支援終結
2	調布	22歳	大学生	オープンスペース利用 相談支援	大学中退し、就労目指す
3	調布	22歳	大学生	相談支援	障害福祉サービスで面談継続
4	調布	20歳	高校卒業	オープンスペース利用	大学進学。障害福祉サービスに移行
5	調布	26歳	大学生	相談支援	大学が順調なため終結
6	調布	23歳	専門学生	相談支援	学校が順調なため終結
7	調布	21歳	高校卒業	相談支援	障害福祉サービス利用検討
8	調布	23歳	大学生	オープンスペース利用 相談支援	障害福祉サービスで面談継続
9	調布	21歳	大学生	相談支援	障害福祉サービスで面談継続
10	三鷹	17歳	高校生	オープンスペース利用 学習支援	利用定着せず中断
11	三鷹	20歳	大学生	相談支援	障害福祉サービスに移行
12	三鷹	24歳	大学生	相談支援	受診希望せず、体調悪化し中断
13	三鷹	23歳	大学生	学習支援	福祉サービス利用を検討
14	三鷹	17歳	高校生	学習支援	大学合格したが進学せず、終結
15	三鷹	16歳	高校生	学習支援・相談支援 オープンスペース利用	福祉サービス利用に向け調整

柱立て③ オープンスペース

(1) 取り組み内容

オープンスペースでは、既存の若者支援事業のユースメンタルプログラムを提供したり、障害福祉サービスの若者支援事業に通所してきている他の利用者とフリーにお喋りをしたり、ゲームをしたり、交流を図る機会を提供した。学習支援の合間に休憩として利用したり、放課後の居場所として利用する方もいた。



オープンスペース

一方で、自由に過ごせる個人スペースの提供を行った。家にこもっているだけの生活を送っていた方にとっては居場所となり、ご自身で持参した学校の課題に取り組んだり、動画を見たり、絵を描いたり、場所となっていた。個室を利用することで、ゆっくり落ち着いて取り組める環境を得る機会とする人や、衝立の個人スペースを利用することで、人の気配があるところで課題に取り組む練習をする利用者もいた。

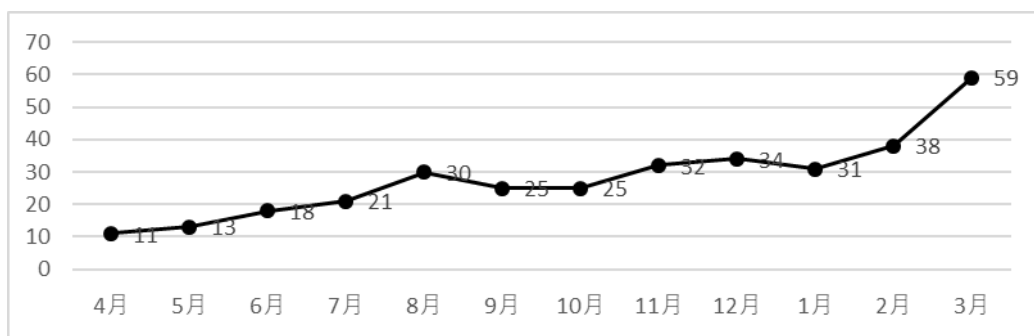
(2) 成果

プログラム参加を通して、時間どおりに来所する習慣が付き、ひきこもり生活で崩れた生活リズムを取り戻すことに繋がっていった。また、他の若者たちとともにプログラムに取り組むことで、他者の中にいること、共に居ること、人と関わることに慣れていった。また、他者理解、自己理解にも繋がり、辛さを抱えているのは自分だけではないことを知る体験にもなったようだった。これまで横の繋がりにあまりよい印象を持っていなかった若者も、人付き合いを楽しめるものと認識をアップデートすることができ、仲間関係を築くよい経験となっていた。高校生から大学生という年齢層の交流で、アドバイスをしたりされたりする経験や話題の広がりの中で相互により影響を与え合っていることも見受けられた。

また、本事業の対象者と共通の課題をもちながら、すでに福祉サービスを利用している同世代と交流する中で、支援を受けることで選択肢を広げられることを目の当たりにし、また自分自身の理解が深まったことで、今後自らが支援を受けるという選択について考えるきっかけとなった方もいた。

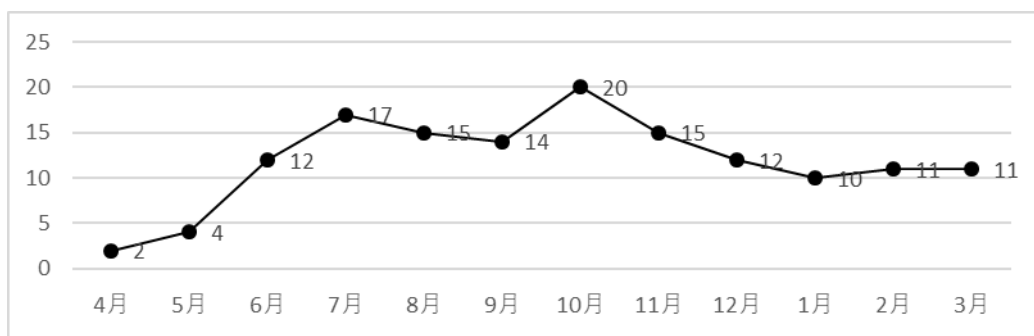
(3) 実績

シンフォニー



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	11	13	18	21	30	25	25	32	34	31	38	59	337

サザン



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	2	4	12	17	15	14	20	15	12	10	11	11	143

柱立て④ 学習支援

(1) 取り組み内容

シンフォニー

大学生による受験勉強のサポートを実施。勉強の方向性を決めたり、進捗状況の共有を図るために月に1回、大学教員、スタッフ、本人とでの関係者会議を行った。

サザン

高校教員による学習支援を実施。個別にそれぞれの学習課題に対応した。学習計画を立て、定期的に状況を確認した。また、教員を通して紹介されたボランティアの大学生にも学習支援を手伝ってもらった。受験前には必要に応じて、個別に回数を増やし対応した。試験会場への行き方などについても、不安がある人には一緒に確認するなどの対応を行った。また、自習室を用意し、家では気持ちの切り替えが難しい人も自習スペースがあることで、継続して学習に取り組むことができた。

(2) 成果

一般的な学習支援と異なって、単に勉強を教えるだけではなく、生活に関する様々な相談に繋がったことは大きな成果だった。本人は学習支援が必要ということで利用を始めたが、他の利用者やスタッフとの関わりの中で、生活に関する支援を受けることの必要性や、肯定的に関わってくれる大人の存在の必要性に気づいていく対象者もいた。

一方で、当初から大学進学だけを目標とした学習支援は、進学という目標が変わったことで終了する場合や、予備校に行くようになって終了する場合があった。その中には、客観的には生活面も含めた支援が必要と思われたが、そうした支援には繋がらないまま終結し、結果的に受験もうまくいかなかった対象者もいた。

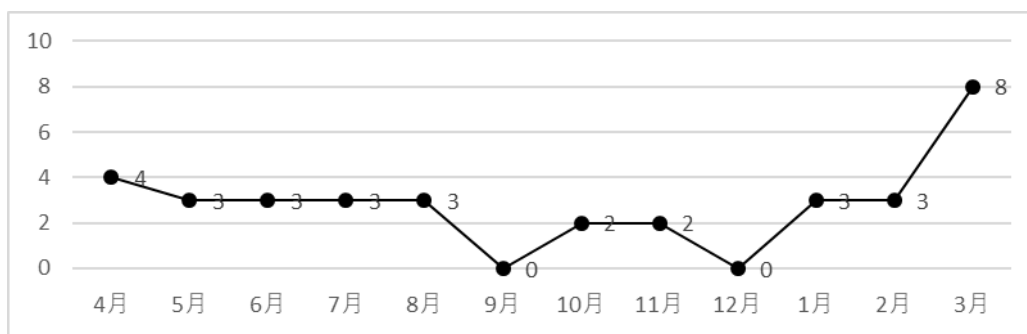
また、心理士などの支援職だけでなく、高校や大学の教員などの教育の専門家と連携してミーティングしていくことで、現実的な進路選択に繋がった。



学習支援の様子

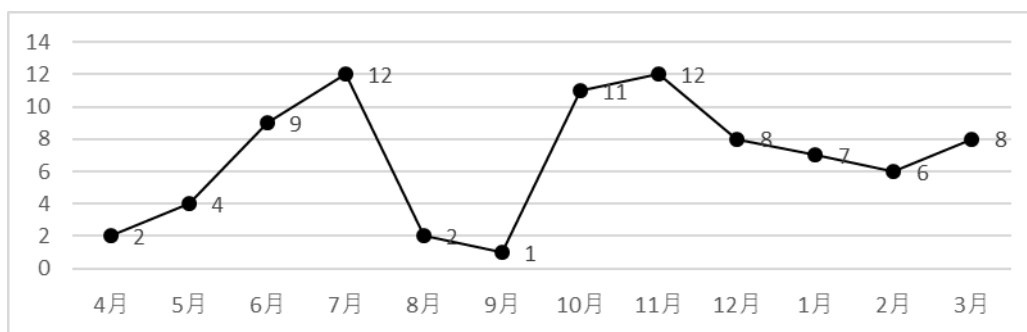
(3) 実績

シンフォニー



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	4	3	3	3	3	0	2	2	0	3	3	8	34

サザン



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	2	4	9	12	2	1	11	12	8	7	6	8	82

柱立て⑤ 相談支援

(1) 取り組み内容

シンフォニー

それぞれの方に担当スタッフを決め、利用者ごとに頻度は異なるが、継続的に適宜、個別の相談の時間を設けた。学校に在籍中の方は、出席、課題等を順調にこなしていくための相談がメインで、ご本人の困りごとを把握し、必要に応じて学校側と調整を図れるよう備えた。進路に迷っているが、ご本人だけでは選択肢のイメージが湧かないという方には、関係機関の見学に同行して、希望の進路選択に繋がられるような支援も行った。

サザン

個別の悩みや進路、今後について、相談時間を設けて相談に応じた。相談内容としては、①大学の単位取得、卒業についての相談、②高校の卒業や大学受験の相談、③メンタルの不調についての相談、④家族の相談、⑤学校や人間関係の相談、⑥生活の相談などがあった。

①大学の単位取得、卒業についての相談に対しては、大学や大学教員との連携、合理的配慮の調整などの支援を行った。卒業が難しい場合、転部、他大学への編入、就職などの可能性も含めて支援した。

②高校の卒業や大学受験の相談については、高校との調整、受験校の選択、学習の計画など、個別に相談に応じた。

③メンタルの不調についての相談については、内容に応じて、定期的な面談でのフォロー、受診の調整や同行を行った。

④家族の相談については、とくに学校の卒業や進路について、家族の抱える不安への支援や利用者との気持ちのズレなどの調整を行い、個別に支援した。

⑤学校や人間関係の相談については必要に応じて、学校との調整を行った。

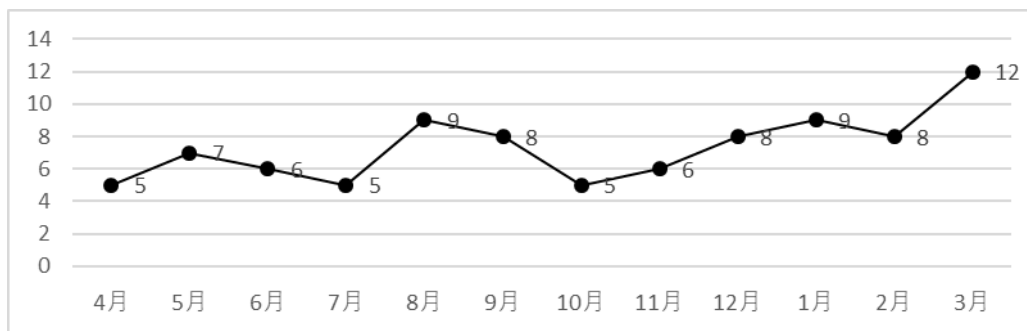
⑥生活の相談については、定期的、および随時相談に応じ、規則正しい生活の維持や、日常の困りごとへの支援を行った。

(2) 成果

当法人の専門性を生かして、発達の偏りなど対象者の特性に応じた相談支援を行った。相談のきっかけは学業の滞りであっても、定期的な関わりを続ける中で、単に学力だけではなく、コミュニケーションの特徴や関心の偏り、必要な情報を得る能力など、いろいろな要素が背景にあることが明らかになっていく場合が多かった。面談による相談だけではなく、学校や家族との調整、関係機関への見学の同行や受診同行など、それぞれのニーズに合わせて柔軟な支援を行うことで、本人の希望する選択に繋がっていった。

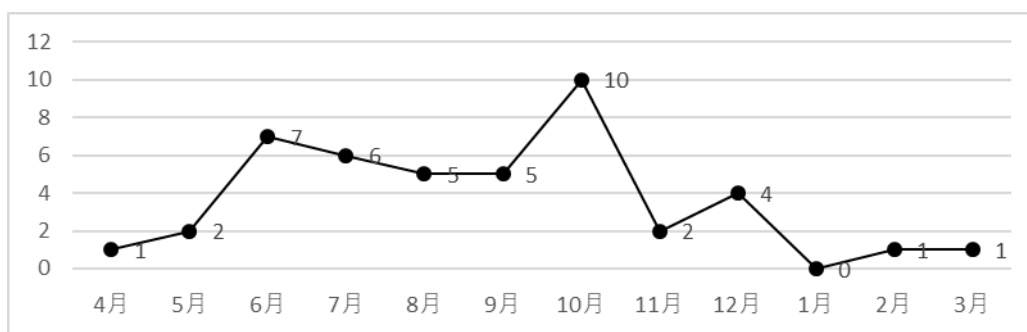
(3) 実績

シンフォニー



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	5	7	6	5	9	8	5	6	8	9	8	12	88

サザン



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
延べ利用人数	1	2	7	6	5	5	10	2	4	0	1	1	44

柱立て⑥ 研修会の開催



講演会の様子

(1) 取り組み内容

若者支援に携わるためのスタッフのスキルアップを目的に、講演会・事例検討会を実施した。

① 講演会の開催

講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」

講師：澤井大和氏（精神科医）

日時：令和4年11月5日（土）14:00～15:30

場所：サザン（東京都三鷹市）

講演会には若者支援に携わる関係者や家族、当事者が参加した。講演では、令和3年に行われた江戸川区のひきこもりに関する調査に触れながら、その背景について、事例を交えながら解説した。講演終了後も活発な質疑応答がなされた。編集した映像をYouTubeで公開した。

② 事例検討会の開催

若者支援の困難事例について、精神科医のスーパーバイズを実施した。発達障害に加えて、家族による虐待のトラウマを抱えたケースで、関わり方や今後の支援の方向性について医療的な視点からの助言を受けた。

スーパーバイザー：南倫氏（精神科医）

日時：令和5年3月3日（金）18:30～20:00

場所：巣立ち会本部（東京都三鷹市）+オンライン

対象：巣立ち会職員

(2) 成果

講演会の広報に関しては、日ごろ連携のある医療・福祉分野のみならず、本事業で連携を構築した、行政、大学、教育委員会などにも協力を依頼した。その結果、家族、精神障害・発達障害当事者、福祉職、医療職、教育職、行政職など多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まった。さらに後日 YouTube で公開し、若者支援に関する情報を必要とする人に向けた発信を行った。アンケートでは、「とても満足」「満足」と答えた参加者が、合わせて 92.5%におよび、「具体例を用いた説明で分かりやすかった」「講演だけでなく、参加者との質疑応答により見識が深まった」などの意見が寄せられ、参加者にとって有益な学びの機会となったことが窺えた。

スーパーバイズでは、医療的な知識が欠かせないケースについて、発達障害やトラウマ治療の最新の情報も交えながら、見立てや関わり方のポイントなどを学んだ。

(3) 実績

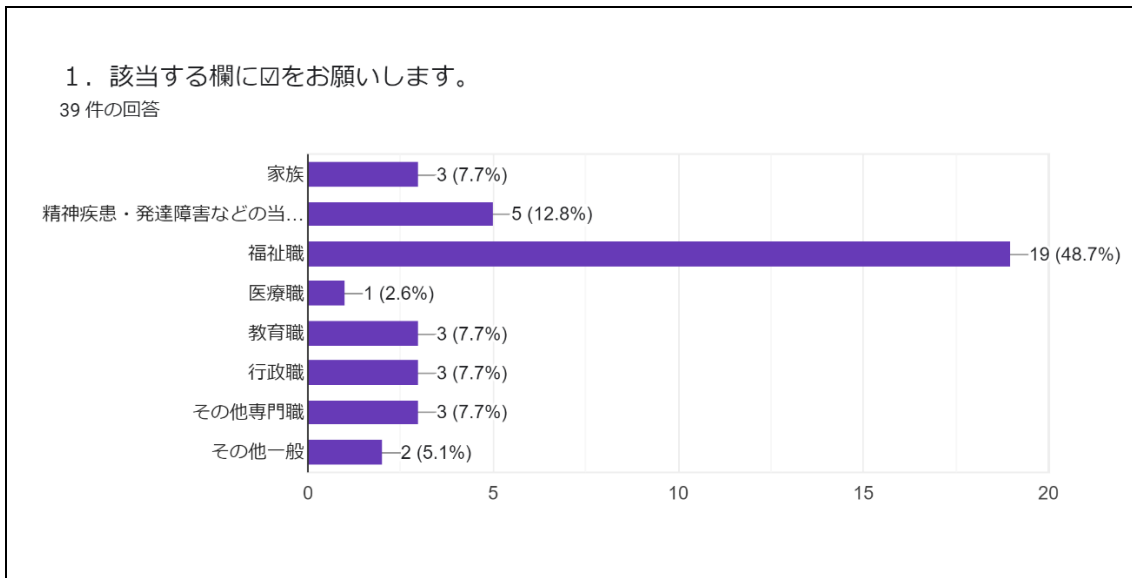
① 講演会の開催

参加者アンケート結果（抜粋）⇒完全版は巻末資料に収載

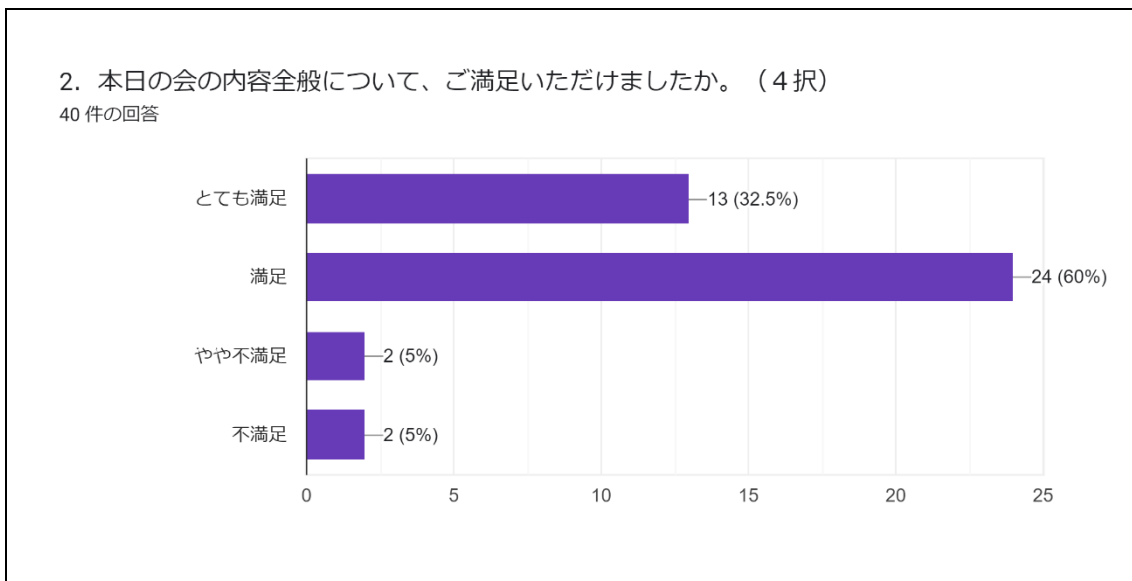
参加者：47 名

アンケート回答者：40 名

1. 回答者属性



2. 講演会の内容全般について



<その他 良かった点を具体的に教えてください>

- ・何事も早期の介入はとても重要だし、環境、人との出逢いはとても大きい。資源、相談先は色々な形でもっと発信していくことが大切ということを改めて感じました。
- ・小学校、高等学校でSCをしています。不登校支援は年々増加傾向にあり、特に家族への支援の充実の必要性を日々感じています。先生の講演はもちろんですが、参加者との質疑応答により、「ひきこもり、不登校」への見識が深まりました。
- ・このような支援のあり方がもっと昔からあれば良かったと思った。たてわりでカテゴライズされないと、今でも支援を受けにくいという現況もあるのでは？
- ・ひきこもりのきっかけとなる要因、またその具体的な背景等、事例もあげてくださり、分かりやすい言葉で話してくださり、発達障害等への知識、理解が深まった。
- ・近年の早期介入についての見直し、先ず誰にでも開かれる相談窓口からの総合的なところからのお話、興味深かったです。
- ・医師の方から専門的な話をうかがえて良かったです。
- ・仕事の上での知識として、また一親として話を聞かせていただきました。
- ・集団的・集合的という概念がとても新鮮だった。ただ、日本の現代社会では教育の場からの改革が必要だと感じた。
- ・大学事務職として学生支援を日々考えています。今後、とても励みになるお話をありがとうございました。

② 事例検討会の開催

参加者：23名

柱立て⑦ 制度設計を考える場の設置



「制度設計を考える会議（第1回）」の様子

(1) 取り組み内容

三鷹市、調布市、狛江市の若者支援担当課長らを招いて「制度設計を考える会議」を2回開催。この事業の実績や各市の取り組みを共有し、効果的な若者支援を実施するためにどのような仕組みや制度が考えられるか、検討した。

第1回では各自治体の若者支援に関する取り組みの現状を共有した。第2回では、各自治体が困難に感じている事例と、今後の基本計画や子ども・子育て支援事業計画策定に向けた動きを共有した。

(2) 成果

この会議を通じて行政との連携が進んだことは大きな成果であった。また、若者支援に関して一歩進んだ取り組みを行っている調布市の状況を三鷹市、狛江市が知り、それぞれの市の取り組みに生かそうという姿勢に繋がったように感じている。

狛江市においては、不登校に関する支援機関の情報をまとめた教育委員会発行の冊子の中で当団体が掲載されることになった。社会資源が少ない小さな市は境界を超えて協力関係を作ろうとしており、さらなる連携の強化を図っていくことが必要である。これまで小学生や学童保育などの施策に注力してきており、若者施策の充実を課題としている三鷹市とは、継続的な連携の必要性を確認することができた。

コロナ禍で会議が減り、近隣の自治体間の情報共有の機会も乏しくなっていたために、参加自治体からは「他市の状況が知れたことは非常に参考になった」「今後もこのような機会があるとありがたい」「参加自治体が増えるとよい」という意見をいただいた。

(3) 実績

① 第1回 制度設計を考える会議

本事業の趣旨を説明し、これまでの活動を報告した。三鷹、調布、狛江の三市の若者支援の取り組みについて、情報を共有した。

狛江市は、今年度、巣立ち会への委託で若者相談会を開始したこと、フリースクールが活動を終了したため、低い年齢層への支援が手薄になっていることが課題であるとのことだった。

三鷹市からは小学生や学童保育などを中心として施策を実施してきたが、中学生以上の若者への支援の充実が今後の課題であるとのことだった。多世代交流センターで週2回、中高生のための時間を設けていること、就労や生活支援の取り組みも進めたいが、課をまたいだ包括的なネットワークはできておらず、外部の支援団体との連携できるような仕組みを作っていきたいとの話があった。

調布市からは、相談、居場所、学習支援の三本柱で行っている子ども若者総合支援事業「ここあ」の取り組み、若者支援に関わる団体の協議会である「調布市子ども若者支援地域ネットワーク」の活動、中高生専用の児童館「CAPS」の取り組みについて紹介があった。義務教育終了後に支援が途切れてしまい、追跡が難しいという課題があり、教育委員会との連携を検討しているとのことだった。

一歩進んだ取り組みを進めている調布市がどのような補助金・制度を利用して施策を進めているかについて共有した。

日時 : 令和4年8月17日(水) 15:30~17:00

開催場所 : サザン+オンライン

出席者 : 山口敦史氏(狛江市 子ども家庭部 子ども政策課長)
西村亜輝彦氏(狛江市 子ども家庭部 子ども政策課 企画制作係長)
鈴木克昌氏(調布市 子ども生活部 児童青少年課長)
高橋雄亮氏(調布市 子ども生活部 児童青少年課)
梶田秀和氏(三鷹市 子ども政策部 児童青少年課長)
和田麻子氏(三鷹市子ども政策部児童青少年課東多世代交流センター担当課長)
田尾有樹子(社会福祉法人巣立ち会)
植田太郎(社会福祉法人巣立ち会)
澤田千恵子(社会福祉法人巣立ち会)

内容 : ①事業説明・活動報告

②意見交換

・各自治体での若者支援の取り組みについて

② 第2回 制度設計を考える会議

第2回は、各市が困難事例と感じているケースの特徴、基本計画や子ども・子育て支援事業計画の現状と今後の見通しについて話し合った。

各市ともに、ひきこもりのケースに対するアウトリーチを課題と感じていた。訪問する仕組みがない場合や、あったとしてもなかなか会えず、支援に繋げることが難しいと感じているとの意見があった。

来年度も本事業が継続する場合の協力を依頼。参加者からは、貴重な情報共有の機会であり、武蔵野市などの三市以外の市とも情報共有ができればという意見があった。

日時 : 令和4年1月19日(木) 15時30分～17時00分

会場 : シンフォニー+オンライン

出席者 : 山口敦史氏(狛江市 子ども家庭部 子ども政策課長)

西村亜輝彦氏(狛江市 子ども家庭部 子ども政策課 企画制作係長)

鈴木克昌氏(調布市 子ども生活部 児童青少年課長)

本間恭平氏(調布市 子ども生活部 児童青少年課)

梶田秀和氏(三鷹市 子ども政策部 児童青少年課長)

和田麻子氏(三鷹市子ども政策部児童青少年課東多世代交流センター担当課長)

丸山 尚氏(三鷹市子ども政策部児童青少年課西多世代交流センター担当課長)

田尾有樹子(社会福祉法人巣立ち会)

植田太郎(社会福祉法人巣立ち会)

澤田千恵子(社会福祉法人巣立ち会)

仁木富美子(社会福祉法人巣立ち会)

内容 : ①活動報告

②意見交換

- ・困難事例について
- ・基本計画、子ども・子育て支援事業計画の現状について
- ・来年度の本事業の計画について

柱立て⑧ 大学等におけるメンタルヘルス啓発活動



学生・教員とリワーク利用者との交流会



成蹊大学での当事者の体験発表

(1) 取り組み内容

学生のメンタルヘルスリテラシーを向上させることを目的として、学生・生徒に対する啓発活動を実施した。当初は大学での当事者による体験談発表のみを予定していたが、本事業によってできた新たな連携の中で、学生・教員の事業所見学や高校での出前授業なども実施することができた。

① 学生・教員のオープンスペース見学・事業説明

サザン（三鷹市）において、施設見学、事業説明、リワーク利用者との交流会を開催した。後日、参加した学生が大学の社会貢献プログラムの一環として当法人でボランティア活動を行うことにもなった。

② 成蹊大学講義での当事者による体験発表

成蹊大学文学部・澁谷智子教授の「社会福祉概論」の講義で、若者支援についての紹介、6名の当事者による体験発表を行い、100名以上の学生が参加した。

③ 東京学芸大学附属高校での授業

選択制の授業「探求プチ講演会」において、若者のメンタルヘルスの不調やそれに対する支援についての出前授業を実施した。

(2) 成果

大学での大人数の講義や高校の授業など、当初の想定以上に広がりをもってアプローチできた。

大学の講義のコメントシートには、自分自身や家族が精神的不調を経験していると書いている学生がともに2割近くに及んでいた。その他のコメントからも、メンタルヘルスの

不調を身近なものとして感じている学生が予想以上に多いことがわかった。当事者の生の声を伝えられたことで、参加者がメンタルヘルスの問題を自分ごととして感じることに繋がった。学生・生徒からは「こういった知識があることは今後の人生の役に立つと感じた」、「自分が中高生のときにこういう支援があることを知りたかった」といった反響があった。自分や周囲が今後困ったときの対処について、情報提供ができたことの意義は大きい。啓発活動を継続していく必要性を感じた。

(3) 実績

① 学生・教員のオープンスペース見学・事業説明

日時：令和4年8月3日(水) 15時～17時

場所：サザン

参加者：成蹊大学文学部・澁谷智子教授と学生3名

国際基督教大学教養学部・羅一等客員准教授と学生2名

② 成蹊大学講義での当事者による体験発表

日時：令和4年12月6日(火) 13時～14時30分

場所：成蹊大学(東京都武蔵野市)

講義名：社会福祉概論(澁谷智子教授)

参加人数：精神疾患当事者6名 学生106名 教員1名

【参加者の感想(一部抜粋)】

- ・ 姉がうつ病気味になったことがあったり、自分自身もバーンアウトのような症状があったときもあったので、とても興味深く聞かせてもらいました。そのときは頼れる人も、そういう状態について話せる人もいなかったのもっと早くこういう存在(支援機関)を知っていたらなと思いました。
- ・ 私が中高生のときに、Color(注：巣立ち会の若者支援プログラム)の存在を知りたかったと思いました。学生のときは、逃げるということできないし、自分は違うと思ってしまい、カウンセラーや先生、親に相談ができません。しかし、Colorのような、楽しく逃げ場となる場所があることは、若者にとって大きな心の支えになると思いましたし、実際にうつ病経験者の方の話聞いて、勇気づけられたとてもよい時間でした。
- ・ 今まで身近にいたことがないため「わかっているつもり」になってしまっているのが現状だと思う。ただ、今後の人生において、そのような人と知り合いになることや、実際に自分がうつ病になり、当事者になってしまう可能性がある。今はよくても今後のために知っていきたくないとあらためて思った。

- ・ 自分だけでなく、家族や友人に、うつ病の症状があらわれても、こういった知識があることは今後の人生の役に立つと感じた。
- ・ 身近に学校に通えていない家族がいるので、今日のお話はけっして他人事ではなく、より身近に聞くことができました。

③ 東京学芸大学附属高校での授業

日時 : 令和5年1月21日(土) 10時~12時
 場所 : 東京学芸大学附属高校(東京都世田谷区)
 講義名 : 探求プチ講演会(西村壘太教諭)
 「自分らしく生きる」 講師: 田尾有樹子
 参加人数: 高校生24名 教員1名

【参加者の感想(一部抜粋)】

- ・ 相談するということは他人に話すために話を整理することでありそこが大切だということが実体験とも重なりとても理解ができました。
- ・ 今まで精神疾患にかかることや心の病気を抱えることは何か特別なことであるのではないかと無意識に感じていました。しかし先生のお話を拝聴して、それは特別ということではなく誰でもかかる可能性は常にあるということがわかり、社会生活を送るのを困難にする人たちを共に社会に含めて共存していくことが大切だと考えました。
- ・ 今回の講演で、これから精神的に辛くなった時などに自分をどのようにしてケアしてあげればいいのかわかりました。また、自分の中で全てを解決する必要はないということも再認識することができました。
- ・ 福祉について私は老人ホームが主としてイメージにありましたが講演を通して自分と同じ世代の人達が抱えている問題について知り身近に感じることができました。また私も普段悩むことがありそれを周りに言えないことが多いので人に相談することの大切さやストレスの解消法について考え自分と向き合いなおすことができました。
- ・ 全員が受ける授業でやって欲しいくらい重要なお話だと感じた。
- ・ 人々はもっと自分を大切にすべきだと感じた。自分らしく生きていける方が自分のために良いので人間関係は自分があるのままでいられるかどうかを重視しながら築いていきたいと思った。

3. 事業成果と課題

(1) 関係機関との連携

私たちはこれまで精神障害者支援の領域をベースに活動してきた。2009年から若者支援を行う中で、大学などの教育機関や行政の若者支援担当課と個別ケースにおいて連携をすることはあったが、今回のように制度化を目指した働きかけや啓発活動において連携をすることはほとんどなかった。

本事業を通して、初めてそうした連携ができたことは大きな成果である。キーとなったのは、「シームレス」というコンセプトである。このコンセプトに関して、大学や教育委員会などの教育分野においても、行政の若者支援担当課においても、どの連携先も同じ課題意識を有していた。たとえば、教育委員会や若者支援担当課では、義務教育終了後に支援が途切れてしまい、その後の状況が追えないことが課題と感じていた。大学も、支援ニーズを有する学生が退学した場合、そこで関わりが完全に断たれてしまうことに不全感を感じていた。そうした共通する課題意識があったために、事業の理解が非常に得られやすく、スムーズな連携につながった。このコンセプトは我々自身が支援を行う中で感じていた課題であり、より柔軟に、より広くニーズある対象者をすくい上げることを目的としたものであったが、関係機関にとっても「障害者福祉」というハードルを感じることなく気軽に相談をしやすいことに繋がり、結果的に連携の間口が各段に広がることがわかった。

また「大学・福祉の連携に向けた会議」「制度設計を考える会議」の開催は、我々が協力者との連携を深める機会となったばかりでなく、協力者同士の交流や有益な情報交換の機会になったという意見もいただいた。コロナ禍で人的交流が大きく制限された中で、どの関係者もそうした機会を失くしており、必要としていたことが痛感された。

本事業を通して、これまで接点がなかった団体にも我々の若者支援の活動を知ってもらい、その重要性について理解してもらうことで、今後に繋がる関係を築けたことは何よりの成果であった。

(2) シームレスな支援から明らかになったこと

我々がかねてより、「支援のニーズはあるが、精神科受診や『障害』という冠に対する抵抗感がある若者」が一定数いることを感じていた。本事業を通じて、初めてそうした人々にアクセスし、支援を行うことができた。その結果わかったことは、実際に支援を受けることにより、また、同時に自分と共通の課題をもちながら障害福祉サービスを利用している同世代との交流を通して、「障害福祉サービス」という制度への抵抗感が軽減し、利用を前向きに検討することが往々にしてあるということである。

また、本人の当初の利用目的が学習支援であっても、関わりの中で学業の滞りの背後にある生活課題や発達特性が徐々に明らかになり、本人もそれに気づいていくこともあつ

た。学習支援以外の機能も有するオープンスペースという場所、教育とメンタルヘルスという異なる専門性をもつスタッフの連携がそれを可能にした。

若者の多様なニーズを拾うためには広い間口を確保することが必要である。そのことを今年度の事業を通じて再確認した。助成金等を利用しながら、受診の有無にかかわらず一定期間支援を実施し、本人に考えてもらうという仕組みの継続を検討していく。また、大学や行政など、今回構築した連携の維持・強化を図り、行政に働きかけてこのような取り組みの制度化を目指していく。

(3) 情報発信と啓発活動

若者支援において大きな課題は情報発信である。今回の事業において、広報活動に関しては満足いく手ごたえを得られていない。顔の見える連携先等への事業説明は積極的に実施した一方で、不特定多数への広報活動に関しては、今一つ具体的な効果に乏しかった。作成したリーフレットは関係機関への周知や説明には役立ったが、対象者が直接的に支援に繋がるきっかけにはならなかった。

反省点としては、ホームページの公開（6月）やリーフレットの関係機関への発送（6月）に関して、事業開始からややタイムラグが生じたことや、TwitterなどSNSを通じた対象者への直接の情報発信が十分にできなかったことが挙げられる。「シームレスな若者支援」のニーズのある人々は、困ってはいるが支援を受けるという選択肢が具体的にイメージできていない人々を含む。そうした層にどうすれば効果的に情報を届けられるかが、今後の課題である。

一方で、学生に対する啓発活動への反響からは、当事者が直接若者に働きかけることによって大きな成果が得られる可能性を感じた。当事者の語りには、若者たちが漠然ともっている生きづらさや自分や周囲の精神的不調の経験をあらためて意識して、誰かの問題ではなく自分の問題だと気づかせる力があることを再確認した。現に困っていなくても、メンタルヘルスの問題は相談してよいし、相談先があることを知ってよかったと、参加した学生たちは確実に感じていた。当事者の協力も得ながら、今後も若者に対する啓発活動には積極的に取り組んでいきたい。

4. おわりに

令和5年4月、こども家庭庁が発足した。4月1日に施行されたこども基本法では、こども施策は「新生児期、乳幼児期、学童期及び思春期の各段階を経て、おとなになるまでの心身の発達の過程を通じて切れ目なく行われるこどもの健やかな成長に対する支援」として定義されている。さらに、第十二条では「国は、こども施策に係る支援が、支援を必要とする事由、支援を行う関係機関、支援の対象となる者の年齢又は居住する地域等にかかわらず、切れ目なく行われるようにするため、当該支援を総合的かつ一体的に行う体制の整備その他の必要な措置を講ずるものとする」とされ、第十三条では「関係者相互の有機的な連携」の確保が謳われている。

国が目指している方向性は、我々が実施した「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業」の目指したものと一致する。しかし、支援の現場は、いまだこうした理念とはほど遠い状況にある。制度と制度の間の壁は分厚く、高く、多くの若者が制度の狭間に取り残されている。

本事業はそうした中で国に先んじての試行であった。シームレスな=切れ目ない支援が国の制度として実現するにはまだまだ時間がかかるだろう。我々は今回得た成果と明らかになった課題を生かして、切れ目ない支援体制の少しでも早い実現を目指し、近隣自治体への働きかけを続けていきたい。そして、今回築いた連携を活用しながら、一人でも多くの若者が自分らしく生きるためのサポートを行っていく。

5. 參考資料

巻末資料（１）講演会「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」 要旨

自己紹介

よろしくお願ひします。

吉祥寺病院と巣立ち会で精神科医をしております、澤井大和と申します。本日は「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援」についてお話しいたします。

普段は、調布市にある吉祥寺病院という精神科病院で勤務しながら、巣立ち会の顧問医を務めております。おもに精神科病院に長期入院後の方の退院支援であったり、地域に移行していくための支援を行っております。

特に関心があるのは、「医療のインクルージョン」というテーマでして、年齢や性別、障害の有無にかかわらず平等に、体の治療も含めた医療が提供される体制づくりに関心があります。特に、長期入院後の方が地域に戻られた後に、糖尿病などの体の治療が十分に受けられないということもよく聞いておりますので、そういったことが無いように、平等に治療が提供できるような体制を作っていければと思っています。

一方で外来の治療では、本日お話しするような、ひきこもりであったり不登校の状態になった思春期・青年期の方の診療も行っておりますので、本日はそういった経験も交えながら、お話しできればと思います。

今日の内容

今日の内容

- ✓ 「江戸川区ひきこもり実態調査」から示されたこと
- ✓ ひきこもり状態のきっかけとして挙げられている要因
- ✓ 若者支援の一つとして：メンタルヘルスの早期介入

本日は話す内容はこの三点です。

まず、近年公表されました、江戸川区のひきこもり実態調査について、そこから示されたことをお話しします。続いて、ひきこもりの状態のきっかけとして挙げられている要因について、いくつかご紹介します。最後に、若者支援の一つとして、メンタルヘルスの早

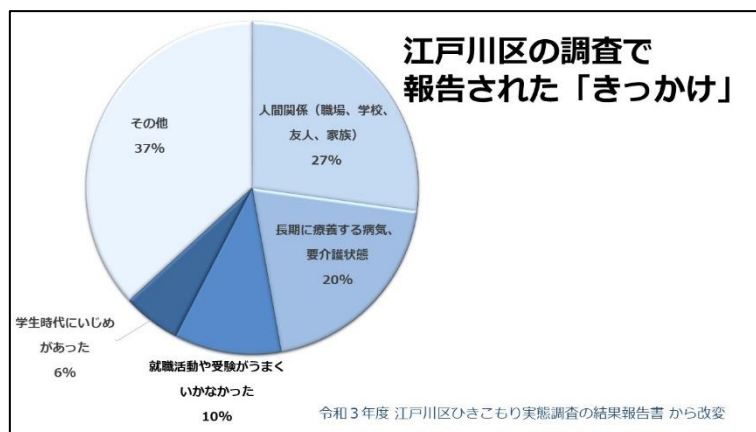
期介入という話題がありますので、最後の方で紹介しようと思います。

ひきこもり状態にある人の「きっかけ」

ではまず、江戸川区のひきこもり実態調査から示されたこととお話ししていきます。そもそものひきこもりの定義ですが、これは厚労省の出しているガイドラインで「様々な要因の結果として、社会的参加を回避して、原則6か月以上にわたって概ね家庭にとどまり続ける状態」と定義されています。

このような状態にある方は、内閣府の行った全国調査によりますと、15歳から39歳で54万人程度、2%弱いらっしゃると推定されています。一方で、令和3年度に実施されたこの江戸川区の実態調査では、15歳以上を対象として、10万件あまりの世帯から回答があったのですが、そのうち8000人の当事者が、困りごとなどを回答していました。なので、この調査に従うと、8%程度いらっしゃったという計算になるかと思います。

このようなかたちで集められた調査結果の中で、ひきこもり状態となったきっかけについて回答がされていました。3割弱が、職場や学校などでの人間関係がきっかけだったと答えています。2割が、長期に療養する病気、または要介護状態となった事、1割が、就職活動や受験でうまくいかなかったこと、6%が学校時代、学生時代にいじめがあったことをきっかけとして回答しています。特に、人間関係など、仲間集団においての問題がきっかけとして、回答している人が多かったと思います。



当事者や家族が感じている「困りごと」

一方で、ひきこもりの状態が続く中で、当事者やご家族が感じている困りごとについても、回答があります。特にひきこもりの期間や、年齢によらず、6割程度が次のような課題を悩みごと、困りごととして挙げていました。ご自身の健康状態であったり、収入や生活資金のこと、ご家族の健康状態に悩んでいる、という回答がありました。

このように、ひきこもり状態になるきっかけは一つであったとしても、その中で、複数

の困りごとが出てくることになります。

当事者や、家族が感じている「困りごと」

- ✓ ひきこもりの期間や年齢によらず、6割程度が抱える
自分の健康
収入・生活資金
家族の健康

「きっかけ」は1つでも、
複数の「困りごと」を抱えている

令和3年度 江戸川区ひきこもり実態調査の結果報告書 から抜粋

一旦この実態調査についてまとめますが、ひきこもりのきっかけ自体は様々、多様です。そして、ひきこもり状態が続く中で、当事者や家族が抱える悩みは多岐にわたります。しかしながら、いざ当事者の方やご家族が相談に行こうとしたときに、ハードルになることが指摘されていますが、いまだに社会、世間が、ひきこもりの状態というものを、他人事として捉えてしまっているために、当事者家族がいざ相談しようとする、相談しづらい状況であるということもこの実態調査の中で指摘されています。

江戸川区の実態調査のまとめ

- ✓ ひきこもりの「きっかけ」は様々
- ✓ 当事者や、家族が抱える悩みは多岐にわたる
- ✓ 社会が他人事と捉えているために、
当事者・家族が相談しづらい状況であることも指摘

思春期・青年期におこりやすい葛藤を抱えている場合

そこでここから、いくつかの、ひきこもり状態のきっかけになりやすい要因に沿って、どういった支援があるのかというのを、お話ししていきたいと思います。ひきこもりの状況になりやすい要因がだいたい3つのパターンに整理されることがあるのですが、それに従って、作成したものです。

思春期・青年期といいますのは、親から心理的な距離を置いて、同性の仲間接近する時期とされてきました。特に仲間集団から脱落することを恐れるあまり、他の人の視線だ

ったり、批判に対して、過敏になりやすい時期とされています。こうした時期に、仲間集団に適応することが難しかったり、実際に起きた失敗体験というのは、たとえ些細なものであっても、強い挫折感であったり、恥の感覚を経験するものであります。こうした経験が、仲間関係や学校生活を回避するきっかけとなることが言われています。

このことの背景にはもう一つ、現代社会の価値観も関わっているかもしれません。現代というのは、自立を優先する社会だと言われています。自己決定であったり、自己責任というのが重んじられがちです。他の人と言葉で議論したり、しっかりと対峙する自我が求められます。しかしながら、具体的な状況でどういうふうに行動すればいいのかというのは、今の日本ではなかなか学習する機会が少ないと思います。こうした中で、他の人を頼るのを否定するような、誤った自立感覚が育つことが言われています。なので、「他の人に頼らず、一人で徹底的にがんばりとおす」ということが強化されてしまって、その結果、孤立に至ることが多いのではないかと指摘されています。実際に、多くの人にとって現代社会というのが生きにくい社会になっているということを前提にして、支援などを考えていくことが大事です。

環境の調整

こうしたことを踏まえて、この思春期・青年期の葛藤状況から起こったひきこもりの支援を考えると、よくまとまっていた本があったので、紹介します。高塚雄介著『ひきこもる心理とじこもる理由——自立社会の落とし穴』（学陽書房、2002）という本です。この著者が書かれている支援というのは、普段の臨床の感覚からも特に大きく違和感の無いものでしたので、今回紹介しようと思います。

ひきこもりの状況への支援 ①環境の調整

- ✓ 相談機関に子ども自身が来られない場合も
まずは親が心にゆとりを持てるように関わる

- ✓ 親に対するアドバイス
子どもの方から話しかけやすい雰囲気をごころがける
親は子どもの治療者になろうとしてはいけない

高塚雄介: ひきこもる心理 とじこもる理由 自立社会の落とし穴, 学陽書房, 2002.

支援の第一番目は、環境の調整と書いてありますが、ひきこもりの状況に困りごとを持って相談にいらっしゃるのは、お子さんご自身ではなく、親御さんがいらっしゃる場合もあります。もし相談機関に、子ども自身が来られない場合であっても、まずは、その相談に行った親御さんが心にゆとりを持てるように関わっていくよう、努めています。

その際、親御さんに対するアドバイスとして、次のようなことを提案しています。まずは、お子さんの方から親に話しかけやすい雰囲気を作ることが、また、親自身が子どもの治療者にはなろうとしないことを最初に提案しています。

ひきこもりの状況への支援 ①環境の調整

子どもから話しかけやすい雰囲気づくりの一例

- ✓ 話す内容にじっくり耳を傾ける
- ✓ 意見を求められたならば、率直に話す
ただし、その意見を押し付けようとはしない
- ✓ 受け容れるかどうかは、本人に委ねる
- ✓ すぐ「行くの行かないの」という話題になることは慎む

高塚雄介. ひきこもる心理 とじこもる理由 自立社会の落とし穴. 学陽書房, 2002.

具体的なそういう雰囲気づくりの一例ですけれども、まず、このようなことを提案しています。お子さんが話す内容にじっくりと耳を傾けるようにしていただくこと、また、お子さんから意見を求められたなら、親御さんからは率直に話をしてほしいこと。ただし、その親御さんの意見を押し付けてはいけません。そして、その親御さんの意見を受け入れるかどうかは、お子さん本人に委ねるようにします。

話ができるようになると、すぐに学校などに行く・行かないという話が出てきがちなのですが、そうした話題になることは慎むように勧めています。こうして家の中で、お子さんから親に話しかけやすい雰囲気づくりをしていながら、適当な時期をみて同世代の集合的な場への参加を工夫していきます。この際、強制や無理強いは禁物ですが、二番目の集合的生活の場の提供と体験学習というのを進めていきます。

集合的生活空間の提供と体験学習

「集合的」といったのは、「集团的」とはややニュアンスが異なります。集団といいますが、仲間意識を前提に集団生活を送るといった寮生活みたいなのがイメージされると思うのですが、ここでいう「集合的」というのはもっと緩やかな繋がりです。個々バラバラな人たち・存在が、たまたま空間と時間を共有しているというぐらいの、緩い繋がりです。

最初にお話があった巣立ち会の運営しているサザンやシンフォニーの施設の中に、若者支援の場があるわけですが、まさにその場は「集合的」な生活空間が提供されている空間ではないか、と思っています。

支援 ②集合的生活空間の提供と体験学習

適当な時機を見て、同世代の集合的な場への参加を工夫
強制や無理をさせることは禁物！

- × 集团的：仲間意識を前提とした集団生活
- 集合的：個々ばらばらな存在がたまたま、
空間と時間を共有している

例) 巣立ち会で運営しているサザン、シンフォニー

高塚雄介. ひきこもる心理 とじこもる理由 自立社会の落とし穴. 学陽書房, 2002.

個別のカウンセリング

このようにして、家や家の外に居場所を確保されている前提として、三番目の、個別のカウンセリングというのを行っていきます。これは、精神科の主治医であったり、カウンセラーさんが行うものです。ひきこもりの当事者となっている方、本人の不安や不満を受け止めながら、一緒に、今の状況の出口を模索していくことを行っていきます。この際、ひきこもりに至る経緯を、解明しきめることは必要ではありません。むしろ、これからどうすればいいのか、といったことを色々な体験学習を並行しながら探していくように関わっていきます。つまり、若者自身にとって精神的な逃げ場になることに徹していきます。

カウンセリングの場でどのように関わるかという一例ですけれども、若者自身の疑問や不安に、まずヒントとなるような考え方をカウンセラー側から提示するようにします。その上で、若者自身が自分の考えを出す機会も保証します。注意が必要なのは、そういったカウンセリングの場で、必ず本人に何かを言わせるように関わるのはNGとされています。というのも、ひきこもりの状況にある方は、意見を押し付けられてしまうことを、大変警戒されていることが多いからです。また、何かを言わなければならないですとか、言わされるといった状況に、恐れを抱いている場合があります。こうしたことに配慮した上で、関わっていくことが重要です。

発達の特徴がある場合

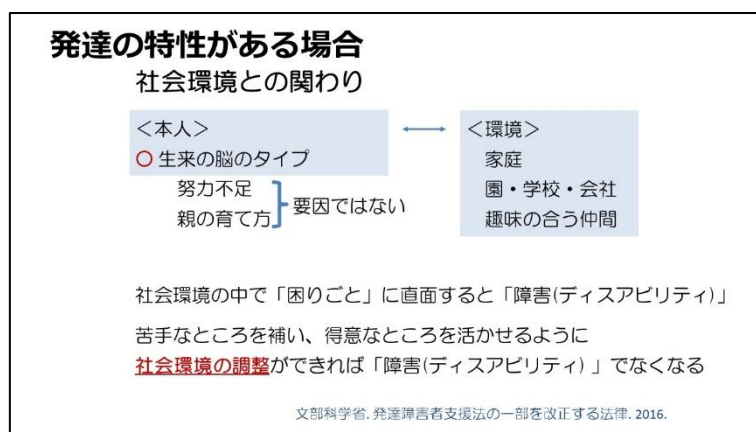
では、ひきこもりのきっかけの分類が3パターンほどあると言いましたが、その2番目のパターンについてお話します。発達の特徴がひきこもり状況に関わっている場合があるので、発達の特徴というものについてお話ししていきます。

発達障害といいますと、法律上は「脳機能の発達の障害であって、症状が低年齢で発現するもの」と定義されています。この中には自閉スペクトラム症であったり、注意欠如多動症、学習障害などが含まれます。ここで大事なことは、発達障害というと、苦手なところが意識されがちだと思うのですけれども、そうではなくて、あくまで脳の一つのタイプ、特性であることが重要です。

なので、苦手な所だけではなくて、強みも合わせ持っているのが発達障害というものです。そういう中で発達障害の診断を付けるときに、精神科医が何を考えているかといいますと、その診断をつけることが今後の支援に繋がってこそ意味があると考えて診断を考えていきます。特に発達障害の場合は、これまでの生活をかなり遡ってしっかり振り返るようになっています。そうする中で、ご自身で発達の特徴を知ることができると、これまでの困りごとであったり、混乱したことについて説明がついて納得ができるということに繋がっていきます。

発達障害は生来の脳のタイプ

少し、見方を変えますと、発達障害というのは本人の生来の脳のタイプということでした。けっして、本人の努力不足でもなければ、親御さんの育て方のせいでもありません。こうした、生来の脳のタイプを持つ個人が、学校などの環境の中で、困りごとに直面すると、それが障害として意識されることとなります。



発達障害の「障害」というのも、「社会との、社会の中での困りごと」という意味での「障害」というのを、日本語にするとどっちも同じ漢字で、ややこしいと思うのですが、じつは英語で元になった単語というのが異なるのです。

この社会との、いわばミスマッチで起こってくる困りごとという意味での障害は、英語でディスアビリティ (disability) と呼んでいます。なので、苦手なところを補って、得意なところを生かせるように環境の調整ができれば、このディスアビリティにあたる障害というのは、改善していくことが期待されます。

発達障害の特徴

診断を付けるときに診断基準というのがあるのですが、細かく以下のように項目が決まっています。ただ、ここの診断に、厳密に当てはまらなくても、苦手なところと強みとしての特性に当てはまる方は結構いらっしゃるのです、少し、ASD の特性について、説明して

いきたいと思います。

発達の特徴がある場合
自閉スペクトラム症(ASD) 診断基準抜粋

- A. 社会コミュニケーション、对人的相互反応の欠陥
- B. 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式
- C. 症状は発達早期に存在していなければならない


診断がつかなくても「**特性(強みと苦手なところ)**」
が当てはまる人は多い

APA. DSM-5. 精神疾患の分類と診断の手引. 2014.

今日はこの発達の特徴の中でも、自閉スペクトラム症についてお話していきます。
自分の特性を知っておく利点についてですが、診断がつく・つかないに関わらず、また、その当事者や周りの支援者であっても、特性を知っておくと、ストレスになりやすい環境やなりにくい環境を把握するヒントになります。また、「苦手なところを補って強みを生かしていく」という環境調整が大事と言いましたが、そうした工夫を考えると、自分にどういう特性が当てはまるかな、というのを知っておけると、考えるヒントになると思います。

発達の特徴がある場合
人とのかかわり方の特徴

得意なところ	苦手なところ
<ul style="list-style-type: none">• 常識にとらわれないユニークな発想ができる• 年齢や身分で相手を判断しない公平さ	<ul style="list-style-type: none">• 相手の考えや気持ちが分からず苦勞することも



<https://www1.nhk.or.jp/asaichi/hattatsu/>

ローナ・ウィング監修. 吉田友子著. あなたがあなたであるために. 中央法規出版. 2005.

それでは、いくつか自閉スペクトラム症、ASDに見られる発達の特徴の例を見ていきたいと思います。よく、人との関わり方の特徴で、右の図のように相手の考えや気持ちが分からず苦勞してしまう、という苦手な所が注目されがちです。ただこれも裏を返せば、「常識にとらわれないユニークな発想ができる」ということや、「年齢や身分で相手を判断しないという公平さ」といった強みに繋がる場合があります。

発達の特徴がある場合

コミュニケーションの特徴

得意なところ

- ことばを正確に使いたい
- 日付や数などの事実も正確に話したい

苦手なところ

- 会話だと相手の言っていることがわからなくなることがある



<https://www1.nhk.or.jp/asaichi/hattatsu/>

ローナ・ウィング監修 吉田友子著、あなたがあなたであるために、中央法規出版、2005。

またコミュニケーションの特徴として、右のように、会話だと「相手の言っていることがわかりにくくなることがある」という苦手なことが注目されることがありますが、これも裏を返せば、「言葉を正確にしっかりと使いたい」ということや、「日付や数などの事実についても正確に話したい」といった話し方の強みになることがあります。

他にも、感覚の偏りを持っている場合があります。細かな音質の違いを認識できたり、絶対音感があるという方もいらっしゃいますが、一方で、ASDを持つ人の中では、聴覚過敏といって、「他の人が聞き流せる音が気になって辛い」ですとか、「気が散る」といったことが起こることが知られています。ここに挙げたような特徴というのは、ASDの診断をもつ人すべてに当てはまるとは言えません。

また、同じ個人の中でも、ストレスを感じたり、緊張感があるときに聴覚過敏が起こりやすいなど、体調に左右されやすいことも知られています。

発達の特徴がある場合の考え方の特徴として、よく注目されることも、いくつか紹介しておきます。

ASDをもつ方の中には、「以前に起こったネガティブなことを引きずりやすい」という「ネガティブ思考や、真面目さゆえにほどほどに手を抜くことが難しく、疲れきってしまう」といった完璧主義が知られています。こうした考え方の特徴であったり、コミュニケーションの特徴であったりを背景として、脳の一時的な不調が出てくる場合があります。

ストレスが重なる中で、うつ状態、やる気が出なかったり趣味のこともやりたくなくなるような、体調になる方もいらっしゃいますし、睡眠の問題として出てくる方もいます。また何となく安心できず落ち着かない、不安症状が出てくる方もいらっしゃいます。発達の特徴をもった上で、こういった脳の一時的な不調が出てくる場合には、何がストレスになっているか、というのをしっかり整理して精神的な休養を心がけるのを、最初に行います。

外来でそうして工夫を一緒に考えながら、それでもよくなるならないという場合に、必要であれば適切な服薬を勧める場合があります。

声かけの工夫

発達の特徴がある場合

サポーターからの声かけの工夫

- 「一度に一つ」
- 「わかりやすくはっきりと話す」
- 「急な予定の変更は控える」
- 「大きな声や、きつい口調で話さない」

青木 省三. 大人の発達障害を診るということ. 2015.

また、発達の特徴をもつときに、ご家族など、周りのサポーターから、声かけの工夫をすることで、ご本人のストレスが軽減する場合がありますので、少しご紹介したいと思います。

よくご家族に提案する声かけの工夫としては、「何かを伝えるときは、一度に一つずつにする」ということ。また、「わかりやすくはっきりと話す」こと。そして、「急な予定の変更は控える」こと。最後に、「大きな声やきつい口調で話さないようにする」ことを、はじめに提案します。

発達の特徴がある場合

発達障害のまとめ

- ✓ 発達障害は脳の特徴・タイプであり、得意なところと苦手なところの両方がある
- ✓ 診断の有無によらず、自分の特性を知っておくことで、得意なところを活かし、苦手なところを補うヒントに
- ✓ 自分に合ったストレス対処をサポーターと探していく

発達の特徴に関してのまとめですが、発達障害はあくまで脳の特徴・タイプであって、得意なところと苦手なところ両方があるという話をしました。発達障害という診断がつく・つかないに関わらず、ご自身の特性を知っておくと、得意なところを生かしたり、苦手なところを補うヒントになります。自分に合ったストレス対処を、家族などサポーターと探していくことが重要です。

精神疾患と関わりがある場合

ではきっかけの分類の3つ目のパターンです、何らかの精神疾患と関わりがある場合もありますので、そのことを話していきます。

ひきこもりの定義のお話を最初の方のスライドでしたかと思うのですが、それをもう一回ここに挙げています。「様々な要因の結果として社会的参加を回避する」ということでしたが、この厚生労働省のガイドラインの中には、「このひきこもりの状況は、原則として、統合失調症の症状に基づくひきこもりは含まない」というように書かれているんですね。ただ、「実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くない」というふうに、ガイドラインには書かれています。つまり、統合失調症という病気は、ひきこもり状態の背景になっている場合があり、統合失調症の場合、未治療期間が短いほどお薬の治療が有効であるため、ぜひみなさんにも知っておいていただきたい病気です。

統合失調症について

統合失調症について
どんな病気か？

- ✓ およそ**100人に1人**に生じる症候群
決して珍しい病気ではない
- ✓ 10代後半から30代に発症年齢のピーク
- ✓ 男女比は、ほぼ1：1
男性の方が発症年齢が比較的早い

『統合失調症』(村井俊哉, 岩波新書, 2019)
『統合失調症薬物治療ガイドー患者さん・ご家族・支援者のためにー』(日本神経精神薬理学会, 2018)

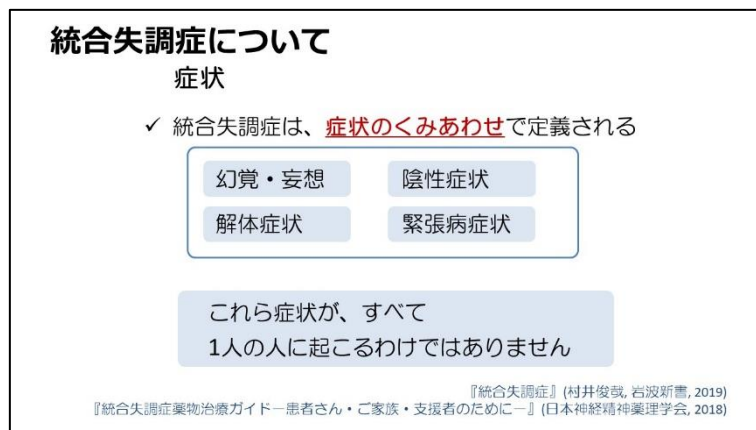
では、統合失調症がどんな病気かと言いますと、およそ100人に1人に生じる、症候群です。決して、めずらしい病気ではありません。10代の後半から30代にかけてが、発症年齢のピークといわれています。男女比はほぼ1対1なのですが、男性の方が、やや発症年齢が低いことが知られています。いまだに発症のメカニズムは解明されていません。

ただ、有力な仮説の一つとして、ドーパミン仮説というのが提案されています。ドーパミンというのは、脳の中で必要な刺激を適度に目立ちやすくするために働いている神経伝達物質のことです。この働きが不安定になることが、発症に何らかの関係があるのではないかと、というのが有力な仮説の一つです。

ただ、現時点では、何か一つの原因があって発症すると考えられているわけではありません。先ほど話したような、脳や神経の不安定さと過剰なストレスの相互作用が関わっていると考えられています。

統合失調症をどのように診断するかといいますと、精神疾患の多くのご病気と同じように、症状の組み合わせによって診断を考えます。

統合失調症の症状



統合失調症の場合、ここに挙げたような症状をどのように組み合わせて持っているかで、精神科医は診断を考えます。少し、一つずつの症状について、見ていきたいと思えます。

まず幻覚ですが、幻聴が多いとされています。人の声で本人を非難したり、命令する内容が多いことが知られています。また、妄想も、他の人から被害を受けるといった内容が多いと言われていて、「周りの人に自分は監視されている」であったり、「警察に狙われている」といったことが、本人にとっては事実として感じられます。

続いて、陰性症状ですが、これは、感情の幅が狭くなること、意欲が湧きにくくなること、また、ひきこもりがちになるといったことが陰性症状として起こってきます。

一見疲れやすさや、お薬を飲んでいらっしゃる場合は心を落ち着かせる作用と区別が難しいのですが、統合失調症の症状自体で、この陰性症状が起こってくることも知られています。

なので、診断がしっかりとついていない状態でひきこもりの状態になっているという場合が、この陰性症状から起こっているものと考えられます。

他にもいくつか症状がありまして、解体症状といって考えや話が脈絡やまとまりを欠くようになることや、行動の目的や意図が周りからわかりづらくなることを指しています。すごく稀な症状ではあるのですが、緊張病症状といって、脈絡のない著しい興奮がある一方で、行動をまったく止めてしまうような、両極端を行き来する症状も知られています。

これらの症状をどのように組み合わせてもっているかで、私たちは統合失調症の診断を考えます。

一方で、これら症状がすべて一人の人に起こるわけではありません。また逆に、ここに

挙げた診断基準には含まれないのですが、頻度の多い症状というのもあるので、ご紹介します。統合失調症をもつ人の中でうつ状態であったり躁状態のような気分症状が出る場合があります。また、手を洗い続けてしまうといった強迫症状などが、統合失調症の症状として出てくる場合もあります。

統合失調症の治療

統合失調症について
治療

- ・ **薬物療法** 統合失調症に効果があるお薬
＝**ドーパミンの働き**を抑えるお薬
- ・ **精神療法** 本人は、「安心しづらさ」を抱えている
例) 人の声で**本人を非難・命令**する幻聴
他者から**被害を受ける**内容の妄想
本人は**安心**できるように心がけた面談
- ・ **リハビリテーション**

統合失調症の治療についてですが、この3つを組み合わせで行っていきます。まずお薬の治療として、統合失調症に効果のあるお薬は、先ほど述べたドーパミンの働きを抑えるお薬というのが使われます。これと並行して精神療法を行います。本人が安心できるように心がけて、面談を行います。幻聴や妄想が、本人にとって事実として感じられるような状況が続いているため、本人は辛さを抱えていることをふまえた上で、面談を行っています。加えて、リハビリテーションも並行して行います。

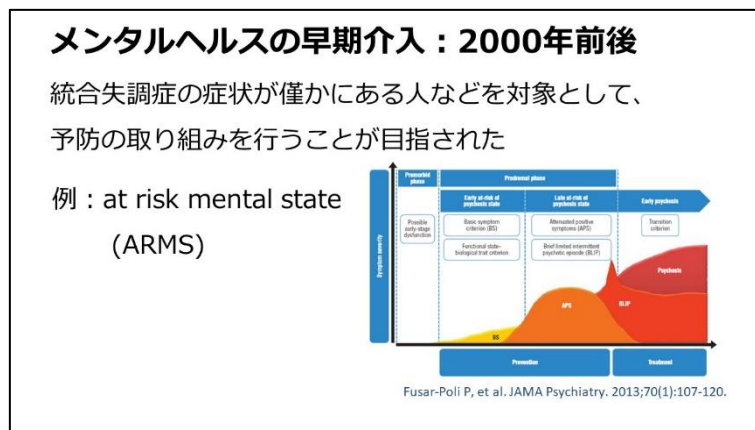
統合失調症について
まとめ

- ✓ 統合失調症は100人に約1人がなる症候群で決して珍しいものではありません
- ✓ ひきこもり状態のきっかけに関わっている場合があります
- ✓ お薬の治療の効果は、未治療期間が短いほど効果を発揮しやすいと言われています

統合失調症に関するまとめですが、統合失調症は100人に1人がなる症候群で、決してめずらしいものではありません。また、ひきこもりの状態のきっかけに関わっている場

合があります。お薬の治療の効果は、未治療期間が短いほど効果を発揮しやすいということが言われていますので、みなさんにも頭の隅に置いていただきたいことの一つです。

見直される「メンタルヘルスの早期介入」



では、今日の最後になりますが、若者支援の一つとして「メンタルヘルスの早期介入」というものについてご紹介します。早期介入というのは、2000年前後から、世界各地で取り組みが始められました。具体的には、統合失調症の症状がわずかにある人などを対象にして、予防的に早い時期から関わっていくことが注目されていました。右下の図がまとめなのですが、この横軸が時間軸なんです。縦軸が症状の重さということになります。何も症状がない時期から、たとえば幻聴や妄想が一時的に出ることであったり、診断がつくほどではないけれども弱い症状があるといった時期が発症する前に一定期間あることが注目されていました。なので、この2000年前後に始まった早期介入の取り組みでは、この時期にある人に対して、医療や他の様々なサービスを導入することで、発症を予防するといったことが目指されてきました。

しかし、この取り組みは近年見直しが進んでいまして、先ほど述べた、統合失調症の弱い症状がある状況から、実際に統合失調症の発症に移行するのは、1年で2割前後に過ぎないということがわかってきました。

また、うつの症状や不安の症状など、他の症状を抱えている状態から統合失調症に移行する場合もかなりあることがわかってきています。

なので、若者の精神保健サービスを考えるときに、診断で縦割りにする関わりというのはあまり的確ではないのではないかと最近言われてきています。

統合失調症の症状に限って見るのではなくて、気分症状や不安症状など、多彩な症状が出やすいのが、思春期・青年期です。なので、診断の垣根を越えて、支援介入をする体制が必要とされるようになってきています。

メンタルヘルスの早期介入：近年の見直し

ARMS→統合失調症の移行：1年で2割前後にすぎない

若者の精神保健サービスでは

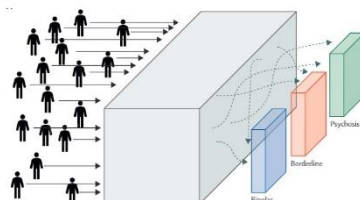
統合失調症の症状に限らず、

気分症状、不安症状など

診断の垣根を超えて、

支援・介入する体制が必要と

されてきている



Shah JL, et al. Lancet Psychiatry. 2022 May; 9(5) 413-422.

右の図は近年の見直しが進む中で、提案された一つのかたちなのですが、いろいろな症状を抱えて悩んでいる方、これは症状に限らずいろいろな生活の悩みでもいいと思うのですが、それに対して、いきなり統合失調症とか躁うつ病といった診断によって支援や治療を縦割りに考えるのではなくて、まず、若者が全員かかれるように、相談窓口を用意する、その中で時間が経つ中で、診断がつくような症状がはっきりと出てきた場合は、それに合わせて必要な治療を行っていく、という二段重ねの支援体制が近年提案されるようになってきています。

巣立ち会のサザンやシンフォニーで行っている若者支援というのは、まさに一元的に、いろんな悩みごと、症状などを、まとめて相談できる空間となっていると思います。

まとめ

まとめ

- ✓ ひきこもりのきっかけは様々です

- ✓ 若者支援において、「きっかけ」の内容を問わず
悩みごとが相談できる体制が求められている潮流

- ✓ 家族だけで抱え込まず、地域の相談機関とつながり
連携して対応していきましょう

今回の講演会のまとめですが、ひきこもりのきっかけは様々です。また、若者支援において、きっかけの内容を問わず、悩みごとが相談できるような体制が求められてきているのが近年の潮流です。ぜひ、ご家族だけで抱え込むのではなくて、地域の相談機関と繋がって、連携して対応していければと思います。

ご清聴ありがとうございました。(質疑応答は省略)

巻末資料 (2)「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」アンケート用紙
令和 4 年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業 講演会
「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の方の支援について」参加者アンケート

本日はご参加いただき誠にありがとうございました。

当アンケートは、今後、当団体が事業を行う際の参考とさせていただくとともに、本事業の実施に必要な助成金（独立行政法人福祉医療機構が行う社会福祉振興助成金）事業実施の参考とすることを目的に行うものです。忌憚のないご意見をいただけますと幸いです。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

《以下の設問で該当する欄にを入れてください》

1. 該当する欄にをお願いします。

- 家族 精神疾患・発達障害などの当事者 福祉職 医療職 教育職 行政職
その他専門職（ ） その他一般

2. 本日の会の内容全般について、ご満足いただけましたか。(4 択)

- とても満足 満足 やや不満足 不満足
- (→設問 3 へ)
(→設問 4 へ)

3. (2で「とても満足」「満足」を選んだ方) どのような点がよかったですか。(複数回答可)

- 役立つ情報が得られた 日頃の生活や活動に役立った スキルアップにつながった
 他の参加者との交流・情報交換が図られた 抱えていた問題・不安の解消につながった
 その他 -よかった点を具体的に教えてください-

4. (2で「やや不満足」「不満足」を選んだ方) どのような点がよくなかったですか。(複数回答可)

- 役立つ情報が得られなかった 日頃の生活や活動の参考にならなかった
 スキルアップにつながらなかった 他の参加者との交流・情報交換ができなかった
 抱えていた問題・不安の解消につながらなかった
 その他 -よくなかった点を具体的に教えてください-

巻末資料（3）「ひきこもりをはじめとする思春期・青年期の支援について」 アンケート結果

開催日時：2022年11月5日（土）14:00~15:30

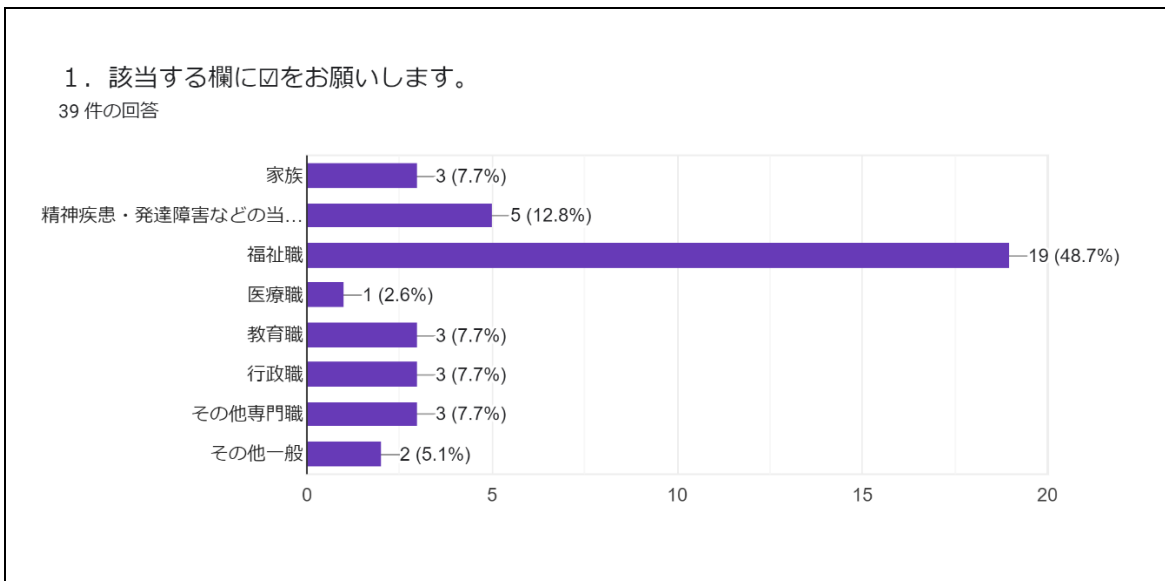
開催場所：巢立ち会 サザン

講師：澤井大和先生

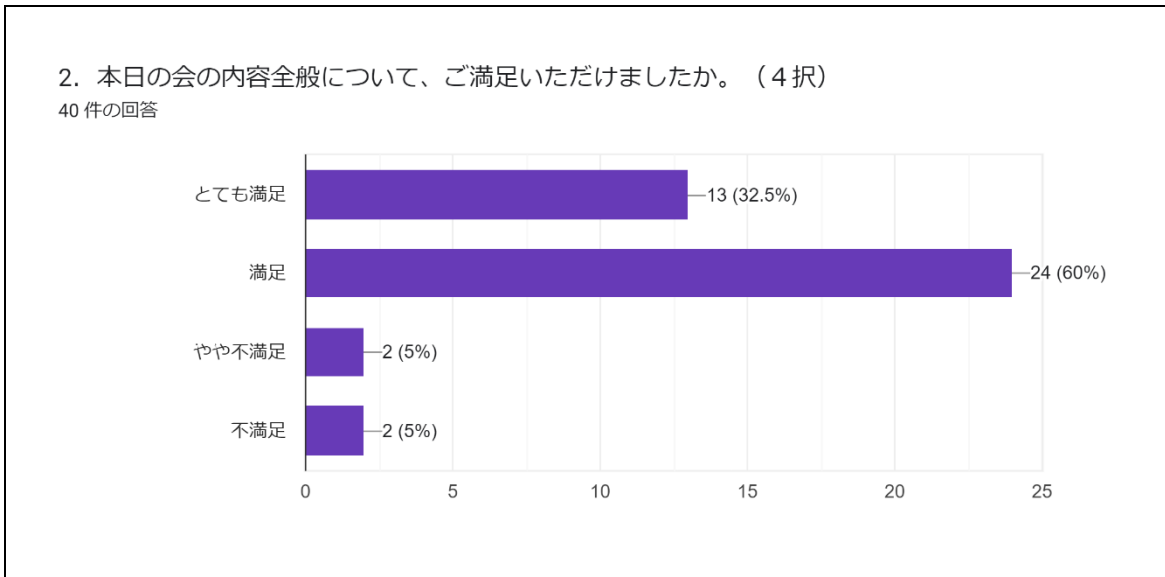
参加者数：47名

アンケート回答者数：40名

1. 回答者属性



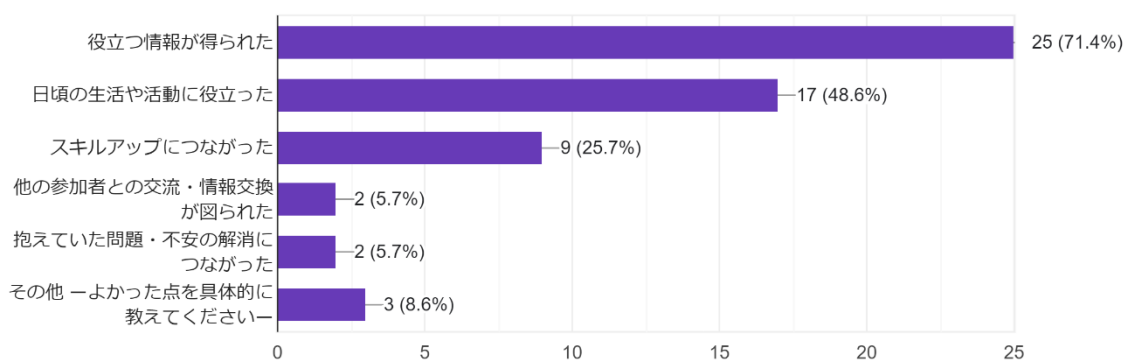
2. 講演会の内容全般について



3. 「とても満足」「満足」を選んだ方について

3. (2で「とても満足」「満足」を選んだ方) どのような点が良かったですか。(複数回答可)

35件の回答



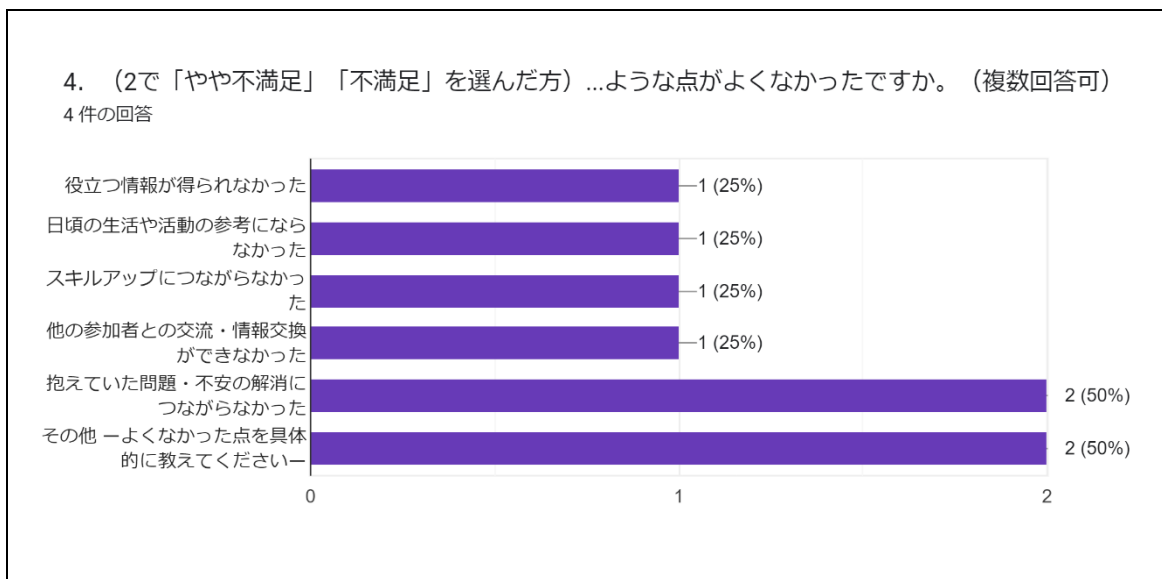
<その他 一良かった点を具体的に教えてください>

- ・具体例を用いた説明で分かりやすかった。
- ・分かりやすい表現でよくまとまっていた。自分の頭の中の整理に役立ったり人に説明するときの参考になったりした。何事も早期の介入はとても重要だし、環境、人との出会いはとても大きい。資源、相談先は色々な形でもっと発信していくことが大切ということを改めて感じました。
- ・メンタルヘルスの早期介入について理解が深められた。
- ・いつも先生のお話分かりやすくまとめられて聞きやすかったです。
- ・小学校、高等学校で SC をしています。不登校支援は年々増加傾向にあり、特に家族への支援の充実の必要性を日々感じています。先生の講演はもちろんです、参加者との質疑応答により、「ひきこもり、不登校」への見識が深まりました。ありがとうございました。
- ・いつも分かりやすい講演をありがとうございました。「東大 HP の意思決定支援ツール」見てみようと思いました。
- ・このような支援のあり方がもっと昔からあれば良かったと思った。たてわりでカテゴライズされないと、今でも支援を受けにくいという現況もあるのでは？
- ・ひきこもり支援の具体的な方法を知ることができた
- ・ひきこもりのきっかけとなる要因、またその具体的な背景等、事例もあげてくださり、分かりやすい言葉で話してくださり、発達障害等への知識、理解が深まった。
- ・近年の早期介入についての見直し、先ず誰にでも開かれる相談窓口からの総合的なところからのお話、興味深かったです。
- ・今の自分にとって有用な知識・考えが得られた。
- ・ひきこもりについての概要が分かりやすく説明されていた。サザンを初めて利用しました。立地が良く素晴らしい施設なのでもっと周知していこうと思いました。
- ・医師の方から専門的な話をうかがえて良かったです。
- ・集团的、集合的の観念が私にとっては新しい考え方で参考になりました。ありがとうございました。
- ・事例が含まれていたのでイメージが付きやすかった。チーム支援についてのお話も聞いてみたかったです。
(例：医師、PSW、教育、心理士など)
- ・ひきこもりの方への必要とされる支援がイメージしやすかったです。具体的な部分は勉強していきたいと思

いました。

- ・色々な立場の方のご経験・ご意見を伺うことができ大変興味深かったです。もう少し具体的な介入が知れると嬉しいなと思いました。ありがとうございました。
- ・日頃感じていることをお医者さんに整理していただき参考になりました
- ・価値、集団、集合というキーワードが良かった。
- ・仕事の上での知識として、また一親として話を聞かせて頂きました。
- ・統合失調症が（4つの）症状の組み合わせで定義されるという点、幻覚・妄想は前提ではないのかと驚きました。
- ・自分の今までの若い人たちとの関わり方が整理できたような気がします。「メンタルヘルスの早期介入近年の見直し」の具体的手はずが早く具体化するといいですね。
- ・講演会自体も興味深かったが、質疑応答が考えさせられた。
- ・集合的な場が自己肯定感の獲得に役立つことを知った点
- ・集団的集合という概念がとても新鮮だった。ただ、日本の現代社会では教育の場からの改革が必要だと感じた。
- ・田尾さんと同じく最後のスライドのイラストはまさに普段自分が感じているものでした。3つの分類もとても自分の実感とマッチしていて参考になりました。ありがとうございました。
- ・質疑応答で、他の方の意見が聞いて参考になった。
- ・まず生活リズムを正しくするのがよいと思うのですが、一人暮らしで授業が多くなかったりすると、毎日朝起きる理由がなくてリズムが正しくならないことをよく見かけます。ゆるく集まる機会を作ることはよいと実感しているのでうまくやりたいところです。
- ・新しく知る知識があった。
- ・大学事務職として学生支援を日々考えています。今後、とても励みになるお話をありがとうございました。

4. 「やや不満足」「不満足」を選んだ方について



<その他 ー良くなかった点を具体的に教えてくださいー>

- ・自分の主治医には性格とか言われてしまう。でも病名があるかもしれないと見ている。
- ・色々な当てはまることはあるが、それを相談機関や病院に行ってもどのように診断してもらったら助かるのか分からない。
- ・単純に良い主治医に出会ってないだけかもしれない。けど、一人でひきこもりの気がありながら社会生活を上手く生きる方法が見当たらない。
- ・リハビリ関係者が話す医師はキレイごとばかり言うという理解の枠内を出ていなかったという感じでした。
- ・よくなかったというわけではないのですが、支援してうまくいかないケースの方が多く、うまくいかないケースからの学びにも焦点を当ててほしかった。子どもたちの自己肯定感の低さという話題がありますが、大人ももっと失敗を語り合えるといいなと思います。

令和4年度 独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
「学生等の若者に対するシームレスな学業・生活支援事業」報告書

令和5年3月発行

編集・発行

社会福祉法人巣立ち会

東京都三鷹市野崎 2-6-42

TEL : 0422-34-2761

<https://sudachikai.eco.to/>